東京学芸大学連続講演会　第6回
交流フォーラム
基調講演
「エコミュージアムによる持続可能な地域社会づくり」

嵯　峨　創　平 氏
NPO法人
「環境文化のための対話研究所」
代表

こんにちは。ご紹介をいただきました嵯峨創平でございます。よろしくお願いします。今回、基調講演ということですが、交流フォーラムの最初としてみなさんに共通する話ができたらいいな、と思います。

この学芸大学の多摩川エコモーションのプロジェクトでは「環境教育」というものをベースに据えていて、私自身も環境教育の活動に関わってきたわけですけれど、最近はこれをもう少し広げて“持続可能な開発のための教育”、略称して“ESD”、つまり“Education for Sustainable Development”という言い方をしていて、（自然）環境だけではなくて人権やジェンダー、福祉など社会的な環境も含めたものを持続可能性という点から考えていくような教育をしていこう、と考えています。私どものIDECというNPO法人もESDに団体として参加している一員でもあります。それから、私の居住地でありNPOの所在地が清瀬市というところで、所沢との境目辺りということであり、広くいえば多摩川バイオリュージョンに入るだろうと思います。狭山丘陵などが周りにあるようなそんな地域から参りました。

（以下、パワーポイントを使い説明）

少しだけIDECの現在の活動状況を紹介します。今、主に３本の活動をしています。福島県の奥会津地方に只見川という川があります。尾瀬沼を水源として新潟県境から会津盆地に流れ出て、そこから新潟県に入ると阿賀野川という名前に変わって新潟市に注ぐ大きな川です。奥会津は豪雪地帯で水力発電のダムがたくさんある地域です。そこでいわば農村型エコミュージアムの研究プロジェクトをしています。また、今日この後ご報告がある多摩ニュータウンの長池公園を拠点とした環境教育のプロジェクトのお手伝いをしたり、それから、少しフィールドが異なりますが、アジア途上国で行われている民衆演劇、つまりアマチュアの人が演劇の手法を使ってempowermentやadvocacyなどを獲得していくためのワークショップの手法を日本でも展開するプロジェクトをしていて、来月国際ワークショップを開催する準備をしているところです。あと、ここに書いてあるようなホームページのウェブ情報を提供したり、メールマガジンを発行するような活動をしています。

今日お越しのみなさんはすでに多分に市民活動や環境教育の活動を実践されている方が多いということで、そういう方たちの交流フォーラムと私は思っておりますが、そういう中で私が今日これから申し上げるエコミュージアムの視点であり私たちNPOの基本テーマである「記憶の継承と対話の場づくり」ということなので、この視点からエコミュージアムのお話をさせていただこうと思っています。しかし、これがエコミュージアムの絶対の考え方である、ということは毛頭ございません。この話を聞きながらエコミュージアムの基本的な視点は何だったかを考え、多少は役に立つ方法論が含まれていれば、みなさんのところでも取り入れて活用していただければと思っています。

取り組みは様々あります。市民参加で町づくりをしたり、環境保全や自然保護のために行ったり、文化財保護や景観保全づくり、環境教育プロジェクトを地域展開する、あるいは、博物館の側から博物館教育の一環としてエコミュージアムを行うこともあります。様々な動機やスタイルがエコミュージアムの活動の中にはすでにあると思います。その根っこにある視点や方法論とは何だろうか、ということを今日私なりにお話させていただこうと思います。

そもそもエコミュージアムという方法が本当に持続可能な地域づくりに貢献できるのか、できるとしたらどんな点だろうかという問いに答え得る特色として、エコミュージアムは博物館学から出てきた言葉で、博物館は基本的に過去に学んで未来を考える糧にするという方法論を持っています。そのため、その視点をどのように活かすかということと、エコミュージアムというのは博物館という館の中で専門家がやるだけの活動ではなくてフィールドで住民主体で、あるいは住民と専門家が協働で行われる活動ですから誰でも始められるということです。私どものNPOでも何もお金がなくても始められたという経験を持っていますので、そういう強みはあると思います。誰からでも始めていいということです。

それから、エコミュージアムが持続可能な地域づくりのベースを作ると思っています。このことはこれから少し丁寧にお話ししていきたいと思っています。広い

意味での様々な生涯学習や環境まちづくりの基礎となるような地域情報や対話の場、対話の方法論を提供することがエコミュージアムの役割であると私は思っています。

少しエコミュージアムのおさらいをします。この一連の講演会でもすでに何人かの専門家の方がお話しされたので、あまり誰が何を言ったという話はしませんが、エコミュージアムという考え方が登場してきたときの時代背景や対象を押さえておきます。

まず、フランスが発祥の地であることはよく知られていますが、1960年代のフランスは「地域主義」という思想的な流れが強かった。博物館界でもルーブルに代表されるような大きな博物館・美術館にアンチテーゼを投げかけたり、中央であるパリだけでなく地域の文化を大事にしよう、地域分権を進めようという主潮の中で形成されたアイデアです。もう一つ大きかったのは、1972年にストックホルムで開かれた国連人間環境会議です。ここで「持続可能な開発」や「成長の限界」といった話が議論されたわけですけど、ここに向けてジョルジュ・アンリ・リヴェールらがアイデアを出した人たちが時の環境大臣らと相談して、博物館界から博物館が人間の持続可能な発展に貢献できることを提案しようということで、その年の秋にICOM（国際博物館会議）の大会があり、そこでの提案を経てストックホルムの会議に博物館界から提案されたという経緯があります。

よくエコミュージアムでは「地域遺産」という言い方がありますが、地域遺産とは地域の中の有形無形文化財のことです。文化財というのは自然の文化財もあれば、建築や民俗芸能の文化財もある。そして、エコミュージアムではそれらの文化財または環境や物にまつわる人の記憶、地域の人が共通に持っている記憶を大切にすることを重要視します。地域遺産が地域や暮らしとどういう関係を持っているのかということを専門家だけが研究するのではなくて市民が自分たちの手で、あるいは専門家と共同で研究していくという研究・調査のスタイルをエコミュージアムは持っています。

地域遺産を活用していく方法としては、博物館ではよく「展示」が行われますが、エコミュージアムではよく「現地保存」ということが言われます。現地の生活空間の中でそれらを保存展示していき、さらに教育プログラム、他地域との交流に役立てていくことができます。これがエコミュージアムの博物館的側面から見た基本的スタイルです。こうした博物館の方法論を基本にした「人づくり」と「地域遺産や地域の記憶の保全」を通じた持続可能な地域づくりを目指すものがエコミュージアムだろうと考えます。

今日、エコミュージアムづくりの方法論として申し上げたいのは「地域学」というキーワードです。地域学というのは非常に古くからある言葉でいまさらそれほど新しくはないのですが、静岡県掛川市が生涯学習で地域学を提唱するなど、全国でも数百はあると思います。実はその「地域学」という言葉が博物館の活動と町づくりの活動をつなぐキーワードになるのです。博物館界の中では忘れられているかも分かりませんが、昭和50年にできた秋田県立博物館の基本構造の中で亡くなられた加藤有次先生、柴田敏隆先生らが「秋田学」というものを提唱しています。そして、地域学というものがこれからの博物館の基本的方法であると述べている。また、それから10年後くらいにできた会津若松市の福島県立博物館（現在赤坂憲雄館長）でも地域学が博物館の活動の中に地域とのつながりとして位置づけられています。生涯学習や町づくりの中で言われている地域学と博物館が発展の方向として目指している地域学は実はかなり近いのです。このことが両者をつなぐキーワードになると考えています。今日これからお話しするのは地域学を実際に展開するときにどのようにするのかという具体的な方法論や地域で積み重ねられてきた経験のお話です。こうした地域学を支援し進めることが博物館と地域をつなぐ、つまりエコミュージアムづくりなのではないかと思っています。

今日は6つの方法論をご紹介したいと思います。先ほど冒頭で申し上げたとおり奥会津の三島町でエコミュージアムに関わるプロジェクトや研究活動をしていまして、そこに至る予備調査的な活動や人との交流からエコミュージアムに関する役立つ知識を得ています。多摩地域のような大都市の郊外地域とはずいぶん様子が違う、あるいは少し資源の質が違うと思われるかもしれませんが、聞いていただくと実はつながっているということを分かっていただけると思います。

1つ目は愛知県豊田市旧足助町にある三州足助屋敷というところです。香嵐渓という紅葉の名所にある民家園博物館的な観光施設です。そこには山里の手仕事を身に付けた本物の職人さんの工房が10数件集まっています。手仕事の様子を見ながら職人さんとおしゃべりしたり、製品を買ったり、併設されているレストランで食事を楽しむことができます。

この三州足助屋敷は昭和55年にオープンして以来26年間ずっと黒字経営を続けていて、町が作った第３セ

クターの施設としては極めて珍しい営業成績を残しているところです。開館して26年になる足助屋敷の職人さんがだんだん代替わりをしてきています。どういう技を身に付けていけばよいのか、また、足助屋敷で職人の仕事を続けていく中で職人さんたちの意識がどのように変わってきたのかということはあまり記録されていません。遅ればせながらそういうことをはじめようということで今年の4月半ばに「聞き書き講座」というものが行われました。

「森の聞き書き甲子園」というのをお聞きになったことがあるでしょうか。NPO法人の樹木・環境ネットワーク協会というところが主催しているもので、毎年100人の高校生が森の名人・名手のところへ通って聞き書きをするというかなり大規模なワークショップです。「森の聞き書き甲子園」方式と呼ばれる**グループワークによる聞き書きの方法**です。専門の講師として塩野米松さん（西岡常一さんという奈良の宮大工棟梁さんの聞き書きを表した『木のいのち木のこころ』で有名）という作家の方が40数年間聞き書きのプロとしてやってきた方法を習いながら一泊二日で足助屋敷の職人さんから聞き書きをしてそれを作品にするというところまでの講座でした。

よく高校生がやる聞き書きの講座では３つ効用が述べられています。世代間の交流、職人の仕事や山村の人の個人史・生活史を聞くことで生き様から学ぶということ、それから話し言葉を文字に整理していく過程で言葉の世界とじっくり向かい合うことができることが非常に大きな学びだと言われています。

聞き書きの方法は実は大変です。およそ10分間聞いてテープで録音しますと400字詰め原稿用紙で10枚になると言われています。それを推敲していって削り落としていったり順序を入れ替えたり重複を整理したりすると分量は10分の1になります。10分の1くらいまで整理して初めて他人が読んで分かりやすい聞き書きになります。これはやってみると非常に貴重な記録になりますし、何よりも、そういう職人さんがいた、あるいは技を伝えていたということがみんなに分かりやすい形で残るということで、たぶん対話の場という意味では最も基本的な方法だと思います。なかなか奥深いものです。こういう職人さんの聞き書きばかりではなく、日本では戦争体験や近代女性史の聞き書きが非常に盛んに行われていますが、身近なところでも聞き書きは非常に有効だと思います。

2つ目は、古写真を使ったインタビューの方法です。これは環境社会学の嘉田由紀子先生や古川彰先生らのグループがずっと琵琶湖周辺でやってきた方法で、**「今昔写真調査法」**と呼んでいます。だいたい現世代の方が生きているくらいの4～50年前の昔の琵琶湖周辺で水と人が関わって暮らしている様子の古写真を集めてきて、それを基に地域を訪ね歩いて現代の写真を撮るという活動で、子どもでも比較的簡単にできる方法です。水辺や町並みの様子が変わっていることはよくありますが、古写真を基に何とか地域の人から手がかりを得ながら同じ場所を探す。できれば写真に写っている人も同じ場所に立っていただき、ご本人が亡くなられている場合その息子さんや娘さんに立っていただき、そういうことをして同じ場所、同じ構図で再び写真を撮ることが最終目的です。その過程でいろいろな環境の変化に対する気付きや地域の人に対するインタビューが当然生まれるわけでそれが非常におもしろいということです。今、嘉田先生らは琵琶湖で実施した方法をパリの下水道やアフリカの湖でも応用しています。これは単にやりっぱなしではなくて滋賀県立琵琶湖博物館の中で「水環境カルテ」というかたちで古写真の比較対象や気付いたポイントなどが蓄積されていて一般にもデータベースとして公開されています。

3つ目ですが、足助屋敷の聞き書きの方法や今昔写真調査法を応用して私の住んでいる清瀬市で**「ヒストリーワークショップ」**という試みを実験的ではあります。2003年から2004年にかけて1年くらい行いました。英国に「ヒストリーワークショップ」と呼ばれる活動の手法があります。1970年代くらいから英国では労働者階級のコミュニティに市民カレッジのようなものがありまして生涯学習の活動が行われます。場合によっては英語が不自由な方もいらっしゃるのでそこで識字教育なども行われるのですが、それとあわせてお互いの人生についての聞き書きをするという講座をやっています。これがヒストリーワークショップと呼ばれるものです。例えば工場街の場合日本の聞き書きのようにかなり長く根気のいる作業だともたないので、聞き書きのコラージュのような方法をとります。工場に勤めていた労働者、工場の食堂で働いていた女性、あるいは労働者が通っていたパブの人、病院、教会などのいろいろな工場街の中にある拠点に聞きに行って、ちょっとしたコラージュ、つまり聞き書きのパッチワークを行うというようなことで、受講者がお互いに聞き合う、あるいは1年間かけていろいろな拠点訪ねて聞くということをやっています。その過程で例えば工場労働者の社員証や食券、パブでの書きつけ、洗濯屋の半券などのいろいろな生活にまつわる一次資料を集めることをし

ました。「ヒストリー・ショップ」というおもしろい試みがありまして、聞き書きの成果や資料をお茶飲みサロンのようなところに展示をしてそこで物を売るのではなくて「あなたの思い出話を少し語っていきませんか」という雰囲気がヒストリー・ショップというスタイルです。ワークショップの“ショップ”というのと同じで“何かする場所”というくらいの感じです。そこでまた一次資料を収集したり、あるいは少し話を聞いてもうさらに深く知っていそうな人を見つけたり、そういうことを英国では半年間くらい開いていたのですが、同じようなことを清瀬でもやってみました。

清瀬はこのあたりと同じように水田のほとんどない畑作地帯で根菜類、麦、陸稲を中心とした食生活であったため、麦作の農家の家に聞き書きをしにいったり、清瀬にも古写真があるのでそれを基に聞き書きをしました。昭和40年代の初めくらいまで麦作をしていたそうで古写真を見ながら写っている子どもや風景のことなどを尋ねました。また、私たちは環境学習の教材として「麦のカルタ」というものを作りました。麦だけのネタで48枚の絵札と読み札を作ってこれでカルタ大会をしました。（スライドの写真を指して）ここにいるおじさんは昔麦の計量や出荷などの担当をしていたため、当時の清瀬の麦の流通に関しては大変詳しい方です。麦のワークショップの際はいつも来てくれます。あと、麦を使った料理を作ってみようということで、ちょうどお花見のシーズンに桜の木の下ですいとんを作るというレクリエーション的な活動もしました。先ほど言いました「清瀬ヒストリーショップ」という名前で区民センターの一室を1週間くらいお借りして展示をしたりスライド上映会をしたりして地域の人のお越しをお待ちしていました。

4つ目は、地域資源や地域遺産を探っていくいろいろな方法論とともにエコミュージアムでは地域のことを語れる**「語り部」**の重要性です。よく環境教育の世界ではインタープリター、自然解説員と言ったりしますが、私たちの気持ちとしては「語り部さん」というほうが地域のことを伝える人を表す言葉としてしっくりくるのでこれを使っています。

みなさん、語り部さんというと遠野市を思い出しませんか。柳田国男の『遠野物語』の舞台で、昔話とか民話の語り部さんと言えば遠野市がすぐ思い浮かぶと思いますが、実は遠野市では古い時代からの伝承のかたちと少し変わってきています。遠野市では大変厳しい寒さの中毎年2月に「昔ばなし祭り」という行事が行われます。もう30年近く続いている古い恒例行事です。最近では遠野市は「どぶろく特区」ということで、どぶろくを飲みながら、温泉につかりながら昔話を聴くというなかなかリッチな気分の催しで、全国から昔話や民話好きの方が集まってきて古い遠野弁の昔話を聴きます。このような語り部さんはもともとおじいさんやおばあさんの世代から話を聞き覚えた方で、現在遠野市では正部家ミヤさんという方が最高齢で語り部さんのリーダーをしています。彼女は父親の話を聞き覚えたということで伝承者としての語り部さんですけど、そういう方だけでは少なくなってきたため語り部さんが維持できなくなっています。昔のように囲炉裏端で伝え、聴くという生活スタイルがなくなってきたことが大きな要因で、それ以外に昭和40年代から遠野市では「民話の里」づくりという形で民話を観光政策の一部に取り込んでいて、『遠野物語』を巡る河童のトレイルやオシラサマを訪ねるものなどサイクリングロードの整備を中心とした観光ルートがたくさんできています。そういう状況で観光客相手に民話を語ってくれる人がもっと必要になってきて、1992年に遠野市で開催された「世界民話博」をきっかけに語り部教室を観光協会と遠野市の博物館が共同で始めました。1年間の講座を経てさらにトレーニングを2～3年積んだ方たちを「語り部の会」という名前で新しいかたちの語り部さんの組織としてできて、その方たちが観光客向けの語りをしています。柳田国男が書いたような民話もあれば日本中にある典型的な民話を遠野弁で語るなどいくつかの話の種類があって新しい語り部さんはどの系統の話もします。そのほかに小学校への出前授業もします。

もともと語り部さんは生活の中で語り継がれてきたもので、おもしろいことに世代を1つ超えて伝承されることが多かった。おじいさん、おばあさんから孫へという形で一世代が25から30年としますと50年くらいのスパンで話が隔世遺伝してきたが、それがもう少し短いスパンに変わってきている。新しい教室で育った語り部さんの活躍の場は主に教育や観光の場ですから、今後どういうかたちで語り部さんが続いていくのか非常に興味深い感じる一方、これが現代的なあり方であると思います。

5つ目は、私が今非常に注目している水俣市でのエコミュージアムの活動です。「村丸ごと生活博物館」というもので集落単位での博物館活動をしています。水俣病の和解が成立したあとに「もやい直し」というキーワードで水俣は新しい環境創造の町づくりをしていて、このときの基本的な方法としては**「地元学」**と呼ばれる新しい地域学のスタイルです。

最初に取り組まれたのが「頭石」と書いて「かぐめいし」と読む頭石集落というかなり谷戸のほうに入った集落です。村の環境課と環境基本条例というか環境指針に協約した地域が生活博物館の登録集落になって、登録されると「生活学芸員」と「生活職人」という人が認定されます。生活職人というのはあまりおしゃべりしないで生活の中の技を伝承していく方で、生活学芸員はいわば案内人で、大型バスでやってくるような観光客ではなくて、様々な研修や交流で水俣にやってくる人たちを案内します。水俣では「当たり前の暮らし」とよく言っていますが、当たり前の山村の暮らしの中にある生活の技術、生物資源の利用法などのすばらしい技を細かく案内します。私たちが参加したときも10メートル歩くのに30分近くかかったくらい道端の植物や石垣などのことを話していただき、なんでもないことの中にあるたくさんの知恵に驚きました。

6つ目の話は、地元学のワークショップではよそ者が地元の方に案内をしてもらうときに「偉そうにお前が解説するな」と言われることがあります。少しばかり専門家であったり町づくりに詳しい方であると「それはどこどこと同じだ」とか「専門的に言うとこうなりますよ」とつい地元の人に教えてあげたくなってしまいます。でも、そういうことはしてはいけない、とにかくびっくりすること。そして分からないことは質問をする。とにかく素直に驚くこと。その驚いたこと発見したことを地元学のカルテに書いて案内人の方にお返しする、そうすることによって案内人の方も案内しっぱなしではなくてフィードバックをもらうことができる。よそ者は自分の知識をひけらかすのではなくて村人の視点に立って知恵などにどっぷり浸ることによって自分の考え方や知識に新しい刺激を受けることができる。私はこれを**「知識循環型案内システム」**と名づけて一方的なインタープリテーションや観光ガイドとは違う案内のシステムがエコミュージアムでは必要になると思います。

福島の奥会津もいろいろな地域資源を持っているところです。冒頭で申し上げたようにここは国家プロジェクトとして電源開発が昭和16年に始まって昭和42年まで続いたところで、大量の人が入りお金持ちになったが、そのあといっせいに引き上げるという事態になりました。そして、昭和40年代に全国に先駆けて過疎化高齢化が起こりました。三島町は工事事務所があったところで旅館や遊郭、病院などが廃れていったときに三島町は内発的な地域振興に努力をしました。全国で初めて昭和49年に「ふるさと町民制度」を始めました。それ以降、「生活工芸運動」や地区の民俗資源を生かした「地区プライド運動」、有機農業の運動などの活動が国家プロジェクトとしての大型地域開発と対比的に置かれ、21世紀にこういう活動がどのように有効なのかということを三島町のエコミュージアム事業は問いかけているのではないかと私は思っています。

この写真が今年の3月に行ったときのまだ雪の残っている只見川です。このように雪の暮らしの道具や郷土料理も残っています。これは通産省の伝統的工芸品にも指定されているもので、マタタビやヤマブドウを編んで作ったものです。1000年以上の伝統を持つような非常に古い手仕事です。

私が今日テーマにしてきたのは**「記憶の継承」と「対話の場づくり」**ですけど、記憶の継承というのは単に古いものを伝えるだけの話ではない、古いものの意味を未来にどのように伝えていくかという話です。対話には様々な手法があります。対話の活動そのものがその先にある環境まちづくりや持続的可能な社会づくりの中での共通理解や合意形成、行動計画のような最も基本的な部分だと思います。エコミュージアムがそういう活動を底辺にして積み上げて情報提供することで、様々なスタイルの持続可能な地域社会づくりが興ってくると考えています。ご清聴ありがとうございました。（会場、拍手）

＜講師プロフィール＞

嵯　峨　創　平（さがそうへい）
NPO法人「環境文化のための対話研究所」（IDEC）
代表理事・事務局長

1961年生。（財）日本地域開発センター研究員を経て、1995年に独立。まちづくり／環境教育／博物館などに関わるプランナー＆ファシリテーターとして活動を始める。今までに訪れたまちむらは北海道宗谷岬から沖縄県西表島まで47都道府県700ヶ所以上。2003年春、「環境文化のための対話研究所」を設立し、現在代表理事・事務局長。